基調講演（要旨）

「隠元禅師と黄檗文化」

原田博二氏（NPO法人 長崎史談会会長）

隠元禅師（法諱隆琦、俗名林曾昺、以下、隠元と記述）は、万暦20年（1592）に中国福建省福州府福清県（現在の福清市）に林徳龍、龔氏夫妻の子として生まれた。3人兄弟の末子。29歳の時、万福寺（福建省福州府福清県）で出家、その後、万福寺の住職密雲円悟、さらにはその弟子で、同寺住職費隠通容について修行した。

42歳の時、費隠について嗣法（臨済32世）、46歳の時、万福寺の住職となった。その後、福厳寺（浙江省杭州府）や龍泉寺（福建省福州府長楽県）の住職を歴任、55歳の時、再び万福寺の住職となった。

そのようななか、隠元を長崎の崇福寺の住職に招こうとする運動が持ち上がった。

隠元を長崎に招請する興福寺の住職逸然性融の招請状は、承応元年（1652）4月、同年8月、承応2年（1653）3月、同年11月と、都合4回にわたって出された。

招請状には、興福寺前住職黙子如定をはじめ、頴川官兵衛、林仁兵衛、頴川藤左衛門、彭城太兵衛などの唐通事や王心渠、何高材、頴川入徳など10数名がその名前を連ねていた。

これら唐通事や唐商のうち、頴川官兵衛は、中国名は陳九官、浙江省紹興府の、頴川入徳は、中国名は陳明徳、浙江省杭州府の、頴川藤左衛門、その父陳冲一は福建省漳州府の、彭城太兵衛、その父劉鳳岐は江蘇省のそれぞれ出身であった。

しかし、林仁兵衛は、その父林太卿が福建省福州府福清県の、王心渠は福建省福州府の、何高材も福建省福州府福清県のそれぞれ出身で、当時、長崎における中国商人のリーダー的存在であった。

なお、2回目の招請状は、支度金等とともに海賊に奪われ、隠元のもとには届かなかった。しかし、3回目の招請状は自恕が、4回目の招請状は古石というように、当時、長崎にいた唐僧がそれぞれ隠元のもとに持参した。

現在と違って交通機関の不便な時代のこと、わずか2年足らずの間に、3回も長崎と福建省の間を往復しているのである。いかに隠元の渡来を待望したか、その熱意のほどがうかがい知れる。

この3回目の招請状を受け取ると、隠元は弟子の良者性光（後の太眉性善）を長崎に派遣、長崎における仏教界の実情を調査させた。この良者らの報告、さらには福州府出身の王心渠や何高材、林仁兵衛などの熱心な運動が隠元の心を大きく動かし、隠元に長崎に行くことを決心させたのであった。

このようにして、順治11年（承応3年・1654）隠元が長崎に渡来することになった。隠元は、5月10日、万福寺を出発した。その一行は、慧林性機など16人ほどの弟子を含む総勢30人ほど、まさに教団ぐるみの移動であった。泉州府などを経て、6月3日に厦門に到着、厦門でしばらく滞在、その準備を整えた。

準備が整った6月21日、隠元とその一行は厦門を出発、7月5日、長崎に無事到着、翌6日、隠元は

興福寺に入った。

興福寺の山門には、隠元が日本で最初に興福寺に入ったということで、隠元が書かれた「初登寶地」の大額が掛けられている。

ところで、隠元が日本に行くことに、隠元に帰依する万福寺の檀信徒の人々がこぞって反対したので、3年たてば帰国すると約束したという。

ところが、隠元の渡来後間もなく、隠元を京都の妙心寺（京都市右京区）の住職に迎えようとする龍渓性潜らを中心とする運動が持ち上がった。

この運動は、結局は反対にあって頓挫したが、万治元年（1558）隠元は、4代将軍家綱に江戸城に招かれ、江戸城で家綱に面会、日本にとどまるようとの命を受け、日本に永住する決心をした。

このようにして、寛文元年（1661）山城国宇治郡大和田（現在の京都府宇治市）に開創されたのが黄檗山万福寺である。

これは、隠元が中国の黄檗山万福寺から来たということを忘れないようにということで、同名の黄檗山万福寺と命名、以後、中国の黄檗山万福寺を古黄檗、日本の黄檗山万福寺を新黄檗と呼んで区別した。

黄檗宗（黄檗宗は、明治9年公認されたもので、江戸時代は臨済宗黄檗派などと称されたが、ここでは黄檗宗として記述する）は、4代将軍家綱、5代将軍綱吉や後水尾法皇などの帰依のもと全国各地に広まった。

これら黄檗宗とともに全国に広まったのが、黄檗文化であった。黄檗文化は、隠元をはじめ黄檗僧によってもたらされた明末清初の、福建省や浙江省を中心とする文化で、日本の江戸時代の文化、特に元禄文化に大きな影響を与えた。

これらの文化は、文人趣味あふれるもので、日本の公家や武家を中心とする知識層の間でもてはやされた。その代表的なものが墨跡と煎茶であった。

墨跡は、隠元をはじめ黄檗僧が揮毫したもので、唐様とか黄檗様と呼ばれ、当時の日本の書道界に大きな影響を与えた。また、隠元は、黄檗僧が煎茶を喫しながら黄檗禅の真理に到達することを理想とした。この煎茶も文人たち間で嗜まれ、今日の煎茶ブームとなっているのである。